

（四）伝統の形成

校旗制定 校旗は昭和二年九月二日に制定さ

れた。「校旗由来書」には次のようにある。

「昭和二年九月二日、本校創立者財団法人奨学会前理事長故三田義正氏ノ寄贈セラレタルモノナリ。ソノ圖案ハ「岩」ノ古字「崑」ノ上ニ

「中」ヲ重ネ桜花ニテ包ミシモノ、以テ「岩中」

ヲ表スト共ニ、当市ノ名勝「石割桜」ヲ暗示シ、

精神一到何事不成ノ信念ヲ表象セルモノナリ。

下隅「岩手中学校」ノ記名ハ前校長海軍大将故柘内曾次郎閣下ノ書ナリ。（後略）」

校旗制定式は本校講堂で挙げられたが、来賓として三田義正、鏡保之助、北田親氏、三田俊次郎、堀合由巳、諏訪安造桜城小学校長らが列席した。

この席上、義正翁は次のように講話した。



初代校長 鈴木卓苗

「本校は昨年四月の創設に係ったものである。元私は現代社会の風潮が漸く浮華軽佻に流れて来たことを慨はしく思ひこの際青年の質実剛健の気風養成が必要なることを感じ中学校設立の希望を鏡農林校長に述べて見たのである。同校長は私の決心如何に依つて賛成もし不同意もするといふことであつた。それで私は直に初一念一貫の決意を為し鏡校長や北田市長の方々にこの志を告げ、本校創立の事を発表したのは同年二月十一日であつたのであつて、文部省の認可を受けたのは同年四月十九日。愈々同月二十四日から授業開始になつたのである。このことに就て殊に尽力された元の関字務課長や三田俊次郎氏に感謝しなければならんと思つてゐる。私は今諸子に質実剛健の気風養成を勧めたい訳は、

私は思ふに教育の目的は第一修身齋家を本とし、進んでは国家社会に貢献する人物を造るにあることと信する者である。故にその目的趣旨を貫徹するにはこの質実剛健の気風に依らなければならんと思ふからである。

私には他意なし、本県教育界に一異彩を点じたいのみである。将来本校職員も生徒もこの趣意で進みたい。若し之に反する際は潔く自裁する決心で、決して校旗を汚さぬやう諸子は飽くまで堅忍不拔の精神で国家有用の人材にならるることを望む次第である。」（「石桜」創刊号所載、原文のまま）

これは建学の精神の直截簡明な表明であつた。すなわち「質実剛健の士」の養成こそ本校の教育目標であり、建学の精神である。

また、「他意なし、一異彩を点ぜんのみ」の言句は、いかにも義正翁らしい表現であつてその後の職員室の心意気ともなつた。

式後、八幡宮、桜山神社を参拝して報告、一同へは紅白の祝餅が二個ずつ配られた。

校旗樹立

制定式の三日後、九月五日には岩手山頂で校旗樹立式が行なわれた。その日、校長以下職員生徒二百余名は、校旗を押し立てて早曉岩手登山を敢行し、山頂に校旗を樹立、万歳三唱して校運の隆昌を祈つた。また校長は奥宮前で「校旗樹立之辞」という祈願文を奉読した。

「校旗樹立之辞」

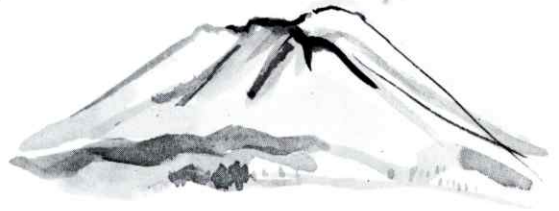
時維昭和二年九月五日曉天ここに岩手中学校新に制定する所の校旗を以て之を岩手山々頂に樹つ、

惟ふに岩手山は本州東北の雄峯其地上に崛起せし時を知らずと雖も玉容雄姿高く天に懸りて恒久に我東北の天地人文を照覧するもの如し、

あ、雲雷閃電を使用し是等を制御し而して恒久不変に威靈を保つもの夫れわが霊山か、岩手中学校職員生徒一同ここに校旗を立て、之を山頂の清気に染め萬里の雄風に靡かず、冀はくは

岩手山々霊の冥祐を仰ぎ我校の文運は日に月に隆昌にして其業績は以て永く国家民人に貢献する所あらむ、

又庶幾くは我校の堅実雄偉なること岩手山の如くあらむことを、



〈卓苗校長日記より〉その二



朝礼内容、予算などもしるされている

晩翠への謝礼

校歌作詞者への謝礼について、卓苗校長の日記には次のように書かれてある。

昭和三年三月十日

土井晩翠翁へ校歌の謝礼をおくること

茶釜及風呂一基

南部紫根染一反

マラソン

昭和三年六月一日 快晴 若葉風薫る

朝礼 マラソン行について

マラソン競技会

八時半第一組出発、完全終了十一時

前後

野宴は十一時五十分より張る。

新調達の釜は三個にて三百有余人を

十分に支え得たり。

職員午餐会は宿直室にて、ビールあり

サイダーあり、疲労と酔とにつぶれて

夕方まで眠る。

慶と養正の三つをその中に読込むように申入れ

たら、先生は詩人であるから、之を取直して神

と祖国と人道の三つに言い替えられた次第であ

る。即ち重暉は朝日の輝きであって、神の威徳

の表徴であり、積慶の慶は我が国歴代聖徳の余

沢であって、之によって皇室と国民との繁栄を

意味し、養正の正は正義の正に当り、世界人道

の根底を為すところのものである。

この三つの語は本校校風の三大綱領を寓する

ものなることを省察し、大にこの精神を發揚さ

れたい。(昭和四・六・二三朝訓)

開校三年目の昭和三年は、一大躍進の年であつ

た。そのころ生徒数は三百となり、職員室の陣容

も拡充強化され、鈴木校長の学園主義が力強く実

践展開される。昭和三年四月の教師陣は次のとお

りである。

曲調であつた。ただ四番の起句の部分がやや曲譜

になじまぬので、鈴木校長が自ら手を加えて現在

のものに直したという。晩翠作では、「無言のさ

とし空を衝く、岩手の山の七千尺 北上川の八十

里」であつた。鈴木校長はこれを「無言のさとし

朝夕に、七千尺の岩手山、北上川の八十里」とし

たのである。

校訓

本校では創立時に制定された校規三大

綱領「積慶・重暉・養正」を校訓とした。三大綱

領は時に三綱と呼び馴らされた。日本書紀、神武

東征のくだりが三綱の典故である。鈴木校長は朝

礼訓話の際、幾度となくこの三綱について語つた。

「校歌の歌詞につきて」と題する朝訓には次のよ

うにある。

「……私は本校校歌を作成する時に、作者の

土井先生に、本校校風の三大綱領たる重暉と積

つ、しみ

かしこみ

我等が祈願をのぶ、

岩手中学校長 鈴木卓苗

「合掌」

この日、あいにくの風雨に襲われながらも一行

の志気は高く、「記念標」を建てて下山した。標

文は「皇風永扇校運隆昌」というもので、これが

のちに碑石に刻まれることになる。

校歌

昭和三年一月二日、土井晩翠から校歌

の歌詞が送られてきた。かねて依頼してあつたも

のだが、申し分のないできばえであつた。鈴木校

長はさっそく筆をとって校歌全節を日記帳に書き

うつした。よほど気に入つたものとみえる。

曲譜の完成は同年一月二十三日、山田耕筈の手

になつた。生徒に歌わせてみると実に雄麗軽快な

本校職員及授業受持

学校長正六位勲六等

鈴木 卓苗

鈴木 卓苗

修身
地理、歴史、国語、漢文

正六位勲六等

鈴木勝二郎

数学、物理、化学

山口 新

博物、数学

久道憲太郎

国語、漢文

大枝 常志

英語、国語

南部 五郎

体操、柔道

広島 英雄

地理、歴史、国語

佐藤 六蔵

剣道

書記 勲八等

島軒十次郎

数学

太田 達人

国語、漢文

山田仁三郎

唱歌

新藤 武

図画

兼平保太郎

教練助教

書記補勲八等

佐羽内 勇

軍事教官

正七位勲五等歩兵大尉大須賀与五郎

このようにして、校風と伝統がいよいよ確かな足どりで形成されて行つた。

(五) 学園主義と学校行事

学園主義

さて、学園主義をかける鈴木校長の訓育方針はどうであつたか。まず、朝礼を重視した。「太陽の照らぬ日はあつても朝訓のない日はない」といわれたほど、鈴木校長の朝礼訓話には有名であつた。決して能弁ではないが、豊富な題材でとつとつと語るその話は、人間味にあふれ

説得力があつた。太空と号し仏道家だつたこともあつて、慈味と威厳がおのずからそなわつていた。学習院式詰襟に岩中の制帽を着用した出勤姿は独特であつたが、それでいて少しも珍妙にうつらなかつたという。

「卓苗先生の毎朝の訓話は、生徒に訓辞しているのではなくして、私、教師である私に、教師としてあるべき道を説いておられるように思われ、生徒諸君よりも私は緊張しながら拝聴したと思ひます。」(小田忠治、「石桜同窓会報」九号)とあるように、生徒ばかりでなく、教師にも耳を傾けさせる内容であつた。なお、これらの朝訓は山田仁三郎教諭が起立したままで筆記し、のちに「朝訓抄」としてまとめられ、校長室に残されている。

昭和三年七月二日、第一回父兄懇談会が開かれたが、そこで鈴木校長は十項目ほどの重点事項をあげて説明した。つきにその要旨をかかげ、学園主義の具体的な姿を知るよすがとしたい。

〈朝礼〉礼の精神を主眼とし、教師と生徒の気持ちを一致させるのがねらいである。思想指導の意味もある。相当重視している。

〈家庭学習〉季節に応じた理想時間割を示し、時間の利用法を指導している。

〈試験〉進級のための試験制度を廃止し、「奨学のため」の試問だけを行なう。満点は目標ではない。まともな力を遺憾なく發揮することが肝要である。不正行為は絶対に許さず、嚴重に制裁を与える。

〈運動〉奨励している。グラウンドは狭いが、量は十分にする。毎週金曜は体育デーで全員にやらせ

る。選手制度はとらず、対外試合には好きなものを出場させる。(有志制度といつた)

〈娯楽〉世の中の娯楽機関が多過ぎる。映画もラジオも、あまり感心しない。

〈遠足・修養講話・勤労デー〉毎月一回実施している。遠足は心身の鍛練、師弟の親密度増大のほか、生徒の個性を知る上に役立つ。修養講話は、思想指導が主眼である。勤労デーは、目的のためには労を惜しまない精神を養うためである。

〈石桜会〉教室の授業ではできない面を、補うものである。月刊「石桜」は日常の訓育を徹底させる目的のほか、家庭と学校との提携を深める意義を持つ。

〈制裁〉生徒には許さない。家では親、国では天子、学校では校長だけが、制裁を行なうべきものである。

〈行状〉天地人に分けて評価しているが、成績評点には関係がない。「地」は自分のことができ、他人に迷惑を及ぼさない程度の者。「人」は自分のことができず、他人にも迷惑をかける者。そして「天」は自分のことばかりでなく、進んで他人の世話もやる者。みんなが「天」を目標とするようにさせている。

昭和三年の行事録をみると、年間二十回の体育デー、十回に及ぶ遠足が実施されている。その他、勤労デー、マラソン会、枝豆会、ぶどう会、茶礼会が催された。文化部では正語会、修養会の定期行事もあつたのであるから、年中、行事続きであつた。学園主義は、行事を通じて実践展開されて

いくのであった。以下、おもな行事について、ふりかえってみる。

遠足 近郊のいたるところに出かけた。たとえば雫石、鶯宿、大志田、深沢山、大萱生、志波城址、姫神等である。ときには汽車で平泉方面にも足をのびした。春にはわらび狩り、冬には雪中行軍のあと兎狩りも行なわれた。

このたびたびの遠足に、中には参加させたがらない家庭も出た。だが、岩手中学校の遠足には、特別の意味あいがあったのである。職員と生徒がふだん限られた教室内で、限られた教科書にもとづいて、限られた時間中に教育作業をしている。その結果は、限られた効果しかあげられないであろう。毎月一回の遠足によってその制限を乗り越え、大自然と一体になることを通じて真・善・美にめざめさせ、人格の完成を目指すというねらいがあった。この遠足について、生徒の受け取りかたはどうであつたらうか。

遠足の思い出

一甲 諸谷泰仙

一昨日は遠足行軍でした。朝は四時二十分、盛岡ステーションに集合でした。自分とS君と行った時は、もう大方集つていました。空はどんよりと曇って涼しい風通る朝でした。みんな楽しそうな顔をしています。間もなくどやどやと汽車は我等をのせて、さわやかな空気を切って進行するのです。

× ×
雫石に下りて、全員二つに分れ演習すること

になりました。自分は追軍の方でした。……みんな手ぬぐいを鉢巻にしました。そして佐羽内先生の指導を受けて前進しました。時々、小雨をほ、に感じます。

突然、「敵がすぐそこにいる」という佐羽内先生の言葉！

おりしも雨は ふうふう

電光すさまじく ころころ……と、

自分等はけわしい雑木林を前進しています。雨は雨とふり洋服はすっかりぬれてしまいました。ほんとうに戦地にでものぞんだような気がしました。

林をぬけるともうもう漠々たる野原、こんなひどい中でも気がすうとして、呼吸が楽になり自由なような気がしました。我等は尚威勢よく前進するのです。

「突撃、どつと衝突した」……

敵味方入り乱れて終わりました。

× ×

一人の雨マントに十人も二十人も競つて、雨をしのいでいます。おされころぶ者さえある。音は音とすさまじく。見渡す限りの天地はまったく、おもくるしい黒雲にとざされてしまいました。

× ×

間もなく目的地の鶯宿温泉に向つて、雫の宿る木々の間を元氣よく校歌を歌いながら足をはこぶのでした。その時の有様といったら想像も出来ぬほどでした。身につけたありとあらゆるものはみんなぬれてしまいました。（「石桜」

医専と本校

昭和三年七月一日は、岩手医専開校式であつた。医専の創設者は、義正翁の実弟俊次郎である。当時の「石桜」編集子のことばをかりれば「畢竟本校の親戚と申すべき同校の開校式に当り我々は衷心以てその開校と将来とを祝するのである」というわけで、当夜の提灯行列に本校生が多数参加し、「勇敢なる水兵」の曲で祝歌を歌つた。祝歌は本校教諭久道吞舟の作詞であつた。

一、岩手の花と咲き出でし

仁の教への医専校

今日ぞ開ける学び屋の

扉仰ぎて寿ほがん

二、体の神秘極めんと

希望輝く人々の

高き理想は岩手山

雲をもつくに比ぶべし

三、健けき身にぞ魂の

清く高きも宿るべし

いざや讃へん諸共に

青人草の陽の光

以後、医専と本校とは、相互に緊密な交流を続けて行く。たとえば、鈴木校長は同校の講師を兼ね、倫理の授業を受け持った。また、ラグビー部が医専ラグビー部の胸を借りたり、寒稽古の際、医専剣道部の指導を受けたりしている。さらに、本校から医専へ進む生徒の数も多かつた。このように、両校の生徒の意識として、互いに相手を兄弟校とみなす考えがあつたのである。

雪中行軍の記

二乙 小保内齋

二月九日は僕の最も期待していた兎狩りを兼ねた雪中行軍の日であった。丁度朝の七時頃絶え間なく降りしきる重い雪の中を冒して不恰好な防寒具と大きなつまごに身を包んだK君らしい友達の一人が通り過ぎた。僕もやおら立って我家を出発した。街々は至って淋しく、偶々出逢う者は職工達や、豆腐納豆売り、牛乳配達のみであった。

が、だんだん通日も繁くなり、途中二三の友達と一緒に集合地なる妙泉寺山麓に向って急いだ。途上の他校生徒達は皆我等の変った恰好を不思議そうな眼を以って見送っていた。集合地に着いた時は、はや一行は出発せんとしている所であった。

初年生を先頭にせる一行は長々とした一列縦隊を作り、激しい吹雪の中を物ともせずに行軍した。

そして手近の山々から順々圧倒的に自然の征服を始めた。さすが名だたる山々も、勇壮な我々健児の意気には到底敵し難く、大小総て征服され、我が脚下にへたばって仕舞うたかのように見えた。

第一回の突撃には物凄い激戦が演ぜられたが収獲は至って少く大きい白兔たった一匹であった。僕はあの尽くる所を知らないような藪中を、しかも積雪脛を没するが如き中をへとへとにな

るまで攻撃していながら収獲のあまりに少きことに稍々悲観に近い感じに打たれた。が相手も命は惜しいに違いない、その為最大の努力をつくして逃れる事に腐心して居る為であろうというのを感じずにはいられなかった。第一回目的の壮挙を終えて休息する間もなく第二回目の戦闘が開始された。

第二回の戦闘は前回に比しては猛烈な攻撃ではなかったが割合に収獲は多く、茶と黒との混合色の大兎が二匹捕獲されたのであった。

第三回目は範囲も広く計画も大なるものではあつたけれども作戦を誤つた為得るところはなかつた。

我々の奮闘も遂いその効なく折角の計画も水泡に帰し無念でたまらなかつた。最後の

第四回の壮挙は途中多くの障礙等があつたが、我等の潑刺たる元氣は物凄い程で、あらゆる障礙を突破し、征服し、突貫、突貫の号令は山野を振動させたのである。

最後の攻撃も得る処少かつたが、今回の行軍は決して無意義には終らなかつた。我等は吹きしきる吹雪を冒し午後三時頃帰途に就いたのである。(「石桜」九号)

クロスカントリーレース これは英国で発達したもので、パブリックスクールではことに盛んだといわれている。石灰ラインのトラックを走るのとは全く趣を異にし、大自然の原野を横断するのである。

あらゆる障害を突破し、身をおどらし、あるい

義士会

戦前の中学校令には、教育を通じて国民精神の涵養をはかるべき旨の規定があつた。本校でも、生徒が忠君愛国の思想をいただき、それを実行に移すよう、いろいろな機会をとらえて、指導が行なわれた。そのひとつが、昭和三年ごろから毎年開かれた「義士会」の行事である。

赤穂義士が、江戸本所松坂町の吉良義央邸を襲い、主君浅野長矩の仇を報いたのは、元禄十五年(一七〇二年)十二月十四日夜のことであつた。そこで、十二月十四日を期して、学校で「義士会」が催された。職員や生徒が、義士についての感想を発表したり、義士に関する文芸作品を味わったり、あるいは演劇娯楽を觀賞するなどして、その忠義の精神を昭和の時代に適応発展させようとするものであつた。

この義士会のもようについて、一回生の高木信明はつぎのように語っている。「義士会の日には授業が午前中で打ち切りとなり、畳敷きの二階作法室に集まるのでした。正面に「忠孝」の掛軸などがかけられた部屋でした。校長先生のお話のあと、女の琵琶師が物悲しく筑前琵琶を弾じたこともありました。生徒の中からも有志が出て義士伝の一席をぶつたり、感想を述べたりして義挙をしのんだわけです。当時は催しのたびに会食をやつたものですが、この義士会の時だけはありませんでしたナ。」

昭和四年を顧みる歌

久道憲太郎

(昭和元年12月より昭和6年3月
まで在職)

○一月数十年来の厳寒を押しして寒稽古
を行ふ
彼の気合此の掛声に厳しかる寒さも避
けて通り行くらし

○二月全校兎狩りを行ふ
誰も彼も勇士に見えぬ雪深き吹雪する

山渉りしなべに

○三月愈々本校も四年生が出る様にな
れり
新しき皿の字の襟章光らせて早来る子
あり三年過ぎたり

○四月新人生百十数名を迎ふ
若苗は園に増へたり健やかに育てんも
のと、培ふ園人

○五月全校マラソン競走を行ふ
濃緑の木の葉も躍る地の上を足どり軽
く走る雄の児ら

○六月勤労園を開設す

働きは天地の道働きを惜しむな子等よ
聖き道ぞ

○七月海野守君水死す
水神の悲しき戯れ望みある男の子も水
の泡と消え去り

○八月校舎校地吾校有となる
学び舎の一切の板一塊の土も吾等のも
のとなりしよ

○九月校旗樹立記念碑岩手山頂に立つ
意気高し岩手の山の頂きに青空指して

立てる記念碑

○十月観武原にクロスカントリーレー
ス行ふ
目も遙か枯野の末に白シャツの動く
見えて連りよぎる

○十一月校舎修繕一先づ成る
学び舎の粧ひ成ればおのづから学ぶ心
も改まるらし

○十二月米春高校志願者を調ふ佐藤麟
来る春の花の工合を気遣ひて膨める芽
を数へ見し哉

は跳び越え、またはよじ登ったりして走り続ける

ので自から、決心、努力、忍耐心等が養われる。

距離は季節や原野状況によつてそれぞれ異なつて

くるが、初心者としては三キロから四キロが精々

という。あまり激しい運動であるために、諸外国

では十八才以下にはあまり奨励してないともい

われている。この珍しい競技が、草創期の欠かせ

ない年中行事であつた。

昭和三年十月十六日、第一回のクロスカントリー

レースが行われた。朝霜の降りたうすら寒い日

であつたが、からりとした絶好の断郊日和であつ

た。学校から一里の道を行軍し、九時には観武ヶ

原の予定地に着いた。当日は騎兵連隊長、中等学

校長、市内各小学校校長も来場して、この珍しいレ

ースを見守つた。

体操の広島教諭が道順を説明し、諸注意を与え

た。各学年を身長順に大組、小組に分け、都合六

組のチームがつくられた。はるか山の麓の赤旗が

目印である。号音一発、スタートは切られた。広

島教諭の記録には次のようにある。

「見る見るうちに横隊に並んでいた筈の生徒

が雁の飛ぶが如く一列縦隊になつて駆けて行く、

先に立つた者は丁度道案内の様に見えた。或は

緑の松の間から、或は枯葉の間からちらほらと

走り行く勇士の白い姿が見える。誠に壯観であ

る。併し彼等の辛苦はその人でなければ知る事

が出来ない。二年の走路は一年のそれより難路

を含み、三年は二年のそれよりも難所が多い。

ランナーは或は草原を走り或は藪を潜りぬけ、

或は林を或は小川をといったふうに、自然の障

害を悉く走破し、示されたコースを完全に通過

してゴールに入る頃は皆奮闘の跡がうかがわれ

た。」

十一時半にレースはすべて終了した。温かい芋の

子汁に舌つづみを打ち、しばらく休憩をとつた。

校歌を合唱して解散したのは二時であつた。

行事の一つであつたが、それには次のような事情

がある。

昭和三年の十月、天皇陛下が東北大演習統監の

ため本県にお見えになつた際、紫波郡古館村の志

和城址頂上が御野立所となつた。この光榮に深く

感激した義正翁は、子息義一名儀であつた二万三

千余坪の同城山を、岩手中学校の基本財産に寄贈

した。由緒ある土地は、個人が私有しているより

公共団体の所有にして、教育的に使用したほうが

よいとの考えからであつた。

寄附の申し出を受けた本校では、さつそく同年

十月七日に三年生一同と職員が現地におもむき、

記念標を建てた。

翌四年五月十六日、頂上にある愛宕神社の御神

体遷座式に参列するため、城山行軍が行なわれた

のであるが、これをきっかけにして、同行軍が本

校の重要行事となつた。

城山行軍 本校にとつて、城山行軍は重要な